論文の内容の要旨

氏名：四家 昌博
専攻分野の名称：博士(芸術学)
論文題目：保育者，小学校教員養成課程におけるピアノ初学者へのピアノ指導
　　−効果的なピアノ学習のための新しい教材の開発−

本論文は，保育者，小学校教員養成課程におけるピアノ初学者への効果的なピアノ指導を目指し，そのために効果的に学習することの出来る新しい教材を開発し，またその教材を使用して養成校における授業を実践し，評価を行ったものである。保育士や幼稚園教諭，小学校教諭を目指すピアノ初学者が，大学や短期大学等の養成課程において，18 歳で全く初めてピアノを学習し始めるということ，また短期間に演奏技能を習得するということに焦点を当て，初学者が，養成校において効率良く学習を進めることができるようなピアノ教材になるように留意し作成した。2018 年度前期に，作成した教材を用いて，実際に養成校の 1 年生の授業を行った。授業後に，成績や自己評価アンケート，また同時に授業を行った教員の意見などから，考察し，教材を評価した。

本論文の構成は全 6 章からなる。第 1 章では，本研究における背景，目的を説明し，その研究方法について記述した。研究の背景には，筆者がこれまで保育者，小学校教員養成の音楽教育やピアノの指導に携わってきた中で，大学に入学して全く初めてピアノを学習する，という学生の割合が少なくないということ，また短い期間，短い時間で一定の演奏能力が求められるということ，さらに，養成校でのピアノ学習に，よりふさわしい学習教材を検討する必要があるのではないか，ということを考えるようになったという経緯がある。研究の方法として，教材の作成にあたり，これまで養成校で使われてきた教材について比較，分析し，そこから見えてくる問題点を考察した。また実際の保育，教育の現場に勤務する保育士，幼稚園教諭，小学校教諭への質問紙やインタビューによる調査を行い，保育，教育の現場が求めるピアノや音楽に関する能力，現場で歌われている歌，ピアノの活用法などについて明らかにした。また養成校でピアノを指導する教員を対象に，初学者へのピアノ指導の際に留意していることや，初学者が苦手としているテクニックの要素，その指導法などについて調査し，教材作成の一助とした。これらの結果を活用して教材を開発，作成し，さらにその教材を使用して授業を行った。

第 2 章では，保育者，小学校教員養成課程におけるピアノ教育の現状について論じた。第 1 節では「保育者，小学校教諭養成の現状」として，保育士，幼稚園教諭，保育教諭，小学校教諭それぞれの人数の推移について，また養成校の新入生のピアノの能力について，調査結果や先行研究をもとに考察した。近年において，保育士，幼稚園教諭，保育教諭，小学校教諭の人数は増え続けており，それぞれの養成校についても，昨年度から今年度にかけて増加している。社会的に保育者や小学校教諭の必要性が高まっていることが分かった。第 2 節では，改正，改訂が行われた保育所保育指針，幼稚園教育要領，小学校学習指導要領等について，「音楽」の視点から考察した。保育士養成のカリキュラム，科目については，今回の見直しでも，前回平成 22 年の改正のように，「音楽」，「表現」という点で大きな変更があった。またそれにともなう養成課程のカリキュラム編成の変更について，これまでの経緯にも着目しながら，今後も継続して検討することの必要性について論じた。第 3 節では養成校向けに作成された既存のピアノ教材のうち，8 つの教材について比較，分析し，初学者にとって十分に配慮されているか，という観点で考察した。保育者，小学校教員養成課程での活用のために工夫されている部分が見受けられるものもあったが，初学者が学習するには，教材の開始から難易度が高いと思われるものや，姿勢やフォームなどの視覚的な説明が少ないこと，また多くの教材が「バイエルピアノ教則本」を底本として作成されており，十分初学者に対して配慮がなされている教材は見当たらなかった。

第 3 章の「保育・教育の現場が保育者，小学校教諭に求めるピアノ，音楽に関する能力」では，保育者への質問紙調査，また小学校教諭へのインタビューによる調査を中心に，その結果を報告した。第 1 節では保育士試験について触れた。保育士試験の実技試験は，現在は「音楽表現」に関する技術，

「造形表現」に関する技術,「言語表現」に関する技術の 3 つの分野から 2 分野を選択して行われており,「音楽表現」に関する試験の内容は,「弾き歌い」であること，また伴奏楽器はピアノに限らず，ギター，アコーディオンも認められていることに注目した。第 2 節では保育者を対象に実施した「保育，教育の現場におけるピアノや音楽に関する調査」について，結果を報告し考察した。今回の質問紙調査では，保育所(園)，幼稚園，幼保連携型認定こども園に勤務している保育者 571 人から結果を回収することができ，その回答から，保育，教育の現場における「弾き歌い」の重要さが示された。また「歌を歌うこと」,「子どもと一緒にピアノや音楽を楽しむこと」が大切である，という声が多く寄せられた。第 3 節では，小学校教諭に対するインタビュー調査の結果を示した。小学校では音楽の活動の幅が広がり，学級担任と音楽専科の教員とでは，求められる内容が異なるが，最低限の能力として,「右手で旋律を弾きながら歌を歌えること」が必要とされることが分かった。保育者からも，小学校教員からも，ピアノを弾きながら歌を歌う「弾き歌い」の能力の重要性が示された。

第 4 章では「初学者への効果的な指導法の考察」を論述した。第 1 節では，養成校でピアノを指導する教員への質問紙調査の結果を報告した。今回の調査では，初学者が苦手とする要素として「両手を別々に動かすこと」が多く報告された。また，ピアノ実技の授業ではあるが，ピアノ奏法そのものよりも，楽譜の読み方や練習の仕方など，副次的な指導も必要であることが示唆された。さらに，学生が意欲をもってピアノに取り組めるよう，精神面への配慮についての多くの意見が寄せられた。第 2 節では前節の結果に対して対応を検討し，養成校での音楽やピアノに関する初年次教育の重要性について論じた。

第 5 章では，教材の開発，作成に関し，着想を得た元になったものについて，また作成した教材での授業実践と，その結果からの教材の評価について論述した。第 1 節では，日本のピアノ教育の黎明期の教材である,『バイエルピアノ教則本』,『リチャードソンのニューメソッド』,『ウルバッハ教則本』,『ニューイングランド音楽院ピアノメソッド』の 4 つの教材について論じた。第 2 節ではフランスの統括的な音楽教育システムであり，既存の音楽作品をソルフェージュ課題に取り入れ，音楽作品の理解と表現を深める「フォルマシオン・ミュジカル」の理念が，保育者，小学校教員養成課程における初学者へのピアノ指導にも有用であると論じた。第 3 節では，実際の教材作成において考慮したことについて，また授業の実践の結果について報告を行った。学習内容や課題，到達目標は同一とし，これまで使用していた教材を使って授業を行うグループと，新しい教材で授業を行うグループとに分け，両者の成績と自己評価の結果から，また同時に授業を実践した教員の意見等から，教材を評価した。グループの違いによって，学生の成績の平均や，自己評価自体には有意差は見られなかったが，「成績と自己評価の関わり」を見ると，これまでの教材を使用したグループでは，個人の成績と自己評価の関係が一致しない学生が複数みられたが，新しい教材を使用して授業を行ったグループではほとんど一致しており，自己認識が適正にされている，ということが明らかになった。

第 6 章では，本論のこれまでの考察，結果を総括し，結論を述べた。ピアノ初学者への授業の内容や課題，目標は同じであっても，教材や指導の方法の違いにより，学習の結果について自己認識が適正にされる，という結果となった。このことはピアノの学習への意欲向上や，課題や練習への取り組みへの動機づけに，また適切な自己肯定感につながり，目標の設定や達成への見通しを持ち，能力向上のための主体的な活動をするにあたって，有用な一助になり得る，と結論づけた。